

「ジジ」の
単独猪猟

神奈川県 田宮 治

●相棒は孫と妻

■某月某日。

いつもの橋に着いたのは午前六時だった。今日は天気も良く風もない。とても気分が良い。車の中で朝食を摂る。いつものことだが、同行の小学一年生の孫と、妻が楽しみにしている山でのひと時である。

愛犬六頭を橋の柵に繋いで、軽い食事をさせるが、なぜか今日は食べない犬が多い。「すぐ放せ」とばかり、前足を立ててクマ号がしきりに鳴く。この日の相棒はクマ、ブル、竜、ラン、ミスのベテラン犬と、一年生のケン号である。

念のため、橋を中心にして周囲を見て回ると、すぐ前の山にイノシシ二頭が登ったようで、崖が崩れている。「朝登ったな、よし」とつぶやきながら孫と妻

の所に戻り、「いるいる、すぐ出るぞ」と知らせた。

そして、そそくさと猟支度を整え、犬達を放した。私もまだ元気なので、足早に小沢から横道を登る。やがて一五分ほどして小峰に立つ。おや、おかしいぞ。車の辺りで犬が鳴いている。一歳のケンかいな。それにしても、ずいぶん賑やかだ。すぐ下に車が見え、その周りで孫と妻が走り回っている。

無線をつけて「淳(妻)、どうぞ」と呼びかける。待っていたように、「パパ、イノシシ、イノシシだ。道の上でランとブルが止めているよ。早く来て」と叫んでいる。私は「本当か？ 今行くぞ」と答えると、まるで転げ落ちるように現場に急いだ。

●わが愛犬達の止め芸

近づいてみると、道の上にイノシシがいて、それをランとミスが吠え込み、下からはブル、クマ、竜が吠え上げている。いいぞ、いいぞ、全犬揃っている。待っている…。だが、場所が最悪だ。道での撃ち下ろしは駄目だ。もし、車でも来たら大変だと思うと、気が気ではない。

地元の狩人達の力を借りて。右が筆者と孫



① わが愛犬の猟芸を見てくれ



上：ミス号，奈智号。下：千壽号，竜号
(この4頭でたいていのイノシシなら止まる)

その場所に行くには、石垣の上のコンクリートを通るしかない。石垣の高さは三〜四mはあろうか。工事のときにできたのだろう。その上の三mほどの平地で、イノシシは犬達と張り合っている。

「待てよ」と獵刀を握りしめ、そろり：と近づくと、それを待っていたかのように、ミスがイノシシの右耳に食い下がり、ランも前足に咬みついて引つ張り、合いになった。「よし、今だ！」と、左足の付け根から刺し入れたが、思うように入らず、イノ

シシは大暴れとなった。

私は慌てて、山側に飛び退いた。突かれれば、三〜四m下は舗装道路で、危険この上なしだ。ドストーン。次の瞬間、イノシシがその道に落ちた。そして、道を横切り小杉林も突き抜け、一目散に橋の下に逃げ込んだ。「逃がしてたまるか」と、犬達もダンゴになって咬み下って行った。ワンワン、ギャンギャン、一方はブツブツ、ギーギーの大騒ぎである。

やつと孫と妻の所に行き、銃を車に置くと、獵刀を頼りに犬達が止めている場所に近づいた。橋の上の孫達からはよく見えるらしいが、何せそこは谷川の横に広がるヨシ藪で、すぐ近くで止めているのに私からは姿が見えず、何とも気持ちが悪い。

あつちに回り、こつちに戻り：して、ちょうど傍に切り株があったので、その上に立って見下ろすと、犬達が止めきついているようだ。上のほうからヨシをかき分けて近づくと、イノシシは最後の力を振り絞って、目の前の谷川の淵の砂地に逃げ込んだ。しかし、犬達に水中に押しやられ、泳ぐように私の前に回

つて来た。

岸が少し高くなっているので、腕^{うで}いて手を伸ばす格好で、今度は慎重にきちつと刺しを入れると、さすがのイノシシも息絶えた。イノシシは、台本どおりにプカツと水に浮いた。「やったぞ」と、橋の上を見上げると、孫と妻がバンザイをして、大声で喜んでる。

●素晴らしき出会いに感謝

とりあえず、犬二頭を引いて車に戻ると、いつの間にか地元^{じゆん}の狩人三人が集まっていたので、イノシシの引き上げをお願いしたところ、快く引き受けてくれた。さすがにベテラン狩人のやることは違う。雑談をしながらであるが手際よく、橋の上まで引き上げるのにさして時間はかからなかった。

その中の一人が肉屋さんで、すぐに自宅まで戻り、解体までしてくれた。私は、その方々の親切がうれしく、自分は後足一本をもらい、残りを三人で分けたい。その日に出会った人であっても、狩人なればこそできたことであり、感謝の気持ちでいっぱいであった。

私はこれからも、こうした出会い、触れ合いを大切にしていきたいと思った。そして、同行してくれた孫と妻、獲物を与えてくれた愛犬達に深く感謝した。和やかな中で記念撮影を行い、皆で獲れた喜びを共有でき、こんな幸せなことはない。できることなら、こうした喜びの輪を広げていきたいと思っている。

手助けをしていただいた狩人達は、孫と妻を相手に、たった一人で、しかも短時間でイノシシを獲るなんて：と驚き、感心していたが、私の犬にも関心を持たれ、今度子犬が生まれたら譲る約束をした。

私が快諾したのは、この方達なら、きっと犬を大切にしてくれるだろうし、子犬の成長も見ることができて楽しみだ：と考えたからである。加えて、「止め獵」の楽しさを味わってもらいたいという気持ちもあった。

彼らと再会を約束して、帰ることになったのだが、わが獵行はこれで終わりではないのである。つまり、これから孫と妻に「ジジ」が感謝の気持ちを示す時なのだ。

たいして楽しくもない(?)の



右から：ラン、クマ、千壽、竜

に、車で何時間でも待つて連絡係をしてくれる。また、群馬への狩行のときなど、出発は午前三時である。眠くないわけがない。そんなわけで、あるときは温泉に泊まり、またあるときは日帰り入浴で、二人にサービスをするのである。

孫も今では温泉が大好きになり、泊まりのときなどは何度も

入浴し、それをとても楽しみにしているようである。

この日は日帰り入浴で、いつもの温泉に立ち寄ることにした。お湯に浸かり、食事をして土産を買う。また、行き帰りの途中にあるドライブインなどにも立ち寄る。これも孫や妻の楽しみのひとつでもあるようだ。

温泉での私は、いつも大ジョッキをおおって寝そべっている。このときのビールの美味しいこと。まして、この日のように獲れたときは、もう一杯、あと一杯と、ついつい進んでしまう。

そして、帰りは妻の運転。寝ていても家に帰れるのだ。まさに、これぞ「狩人冥利」に尽きるといふものだ。次回の出猟を楽しみに、ひとまず今日はここまで。なお、この日捕獲したイノシシは、六〇〜七〇kgだったが、丸々していて美味しいイノシシだった。

いざ、新猟場へ

■某月某日。

この日も、孫と妻が同行しての出猟である。自分の体力に合った、犬のかけやすい単独猟に向く猟場の選

定は、楽しい狩猟には欠かせない条件となる。

私が山梨のこの猟場に初めて来たのは、昨年(平成十五年)の二月の初めであった。初猟の頃は、ほとんど群馬や長野に出猟しているが、雪が多くなり体力的にきつくなってくると、例年山梨に出猟するのである。

この日も雪が二〇cmも積もったので、地図で目星をつけた場所に車で登って行くと、犬達を繋ぐ格好の橋があった。その橋に全犬を繋いで食事を与えていると、九十九道の上のほうから一人のハンターがジムニーで下りて来たので挨拶をすると、車を止めてくれた。

私と同じ歳ぐらいで人柄の良さそうな方だったので、「この沢を狩ろうと思っているのですが、イノシシは居ますか？」と訊くと、「この辺には居ますよ」の返事が返ってきた。私は「ご一緒しませんか？必ず獲れますよ。一人でも獲れるのですから…」と彼を誘ってみた。

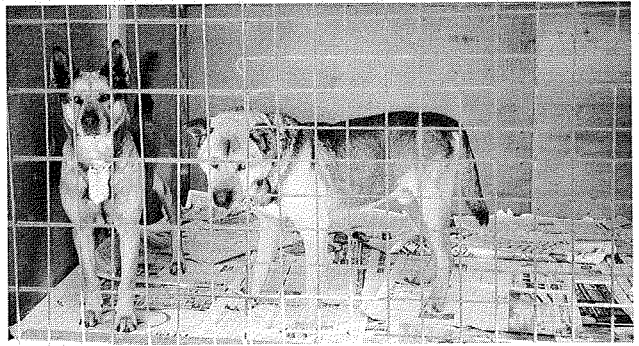
その方は、ニコニコ笑いなながら「この下の沢に三頭のイノシシ跡があり、グループでそこをやることになっているので、今

日は駄目ですね。でも、平日ならやれるので、いつでも来てください」と言われ、私を全くよそ者扱いしないのが何よりもうれしかった。

この方が後日大変お世話になる松土さんで、今年(十五年度猟期)は共猟していただいた。実に立派な方で、町の要職に就かれていますとのことだった。また、地元の大物クラブに所属されていて、この松土さんのおかげで渡辺さん、岸本さん、そしてグループの皆さんに紹介していただき、楽しい猟をさせていたことがができるようになり、本当にありがたいと思っている。

話は戻り、「それでは頑張ってください」と言い残し、松土さんは下って行かれた。私は一人で橋の沢に入ることにして、孫と妻に二人で遊ぶ雪ゾリを出してやり、全犬を放して奥へと狩り進んだ。この山は、なかなかの山だが、かと言って岩場もない、とても良い猟場のように思えた。快晴で獲れそうな気がしたが、二時間ほどかかって一番奥の岸まで行ったが、イノシシの足跡一つない。

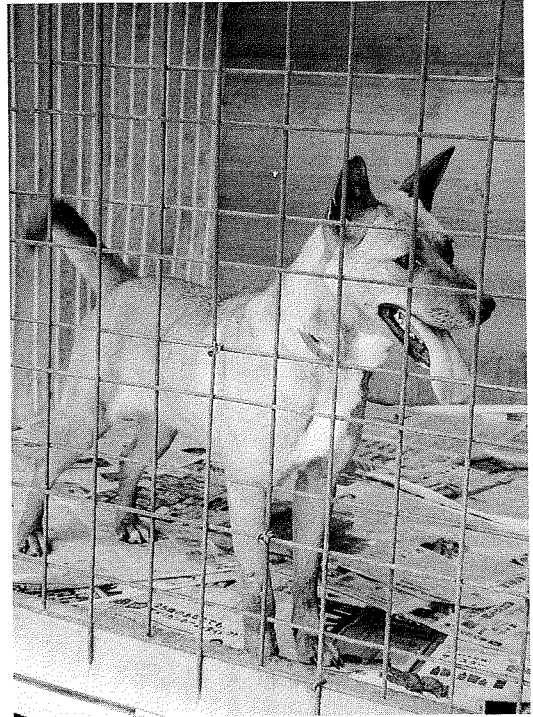
松土さんが言っていたあの三



右：ミス号(牝，宝犬である)，左：奈智号(咬む止犬)

頭で終わりかな、と思いながら車に戻り、全犬をひとまず車に乗せ、次の獵場、つまり裏の沢に入ることにした。見晴らしの良い所に車を止め、早めの食事を摂る。

「昼からはやるぞ」「この沢にはきつと居るよね」などと話しながら、沢の入口三〇〇mほどの所をグルッと回ってみた。そこには、昨夜川を横切ったイノシシの跡が深い雪に残っていた。少し跡を追ってみると、そのイ



来る獵期に一軍入りするクルミ号(屋久島犬)

ノシシは先ほどの沢のほうの山に登っている。しかも三頭で、一頭は大物である。

あの沢に跡がなく、ここから入った：ということは、この山のどこかに必ず寝ている。私は確信した。スキップするように車に戻り、「居るぞ、大きいのが」と、孫と妻に伝えると、素早く犬達を放し、イノシシの後をつけることにした。

今日の犬群は、大型咬み止め犬の竜と奈智、クマとブルとシロのベテラン犬と、千壽である。千壽は一歳の牝だが、「このパツクなら必ず止める。この雪なら、

すぐ見つかる」の確信のもと、イノシシと犬群が通ったことで、まるで小道になっている後をつけ始めた。

小峰を二つ横切り、歩くこと三〇分。大きな峰を越えた所で、ブルとクマが鳴き出した。「居たぞ、よしよし」と、こけながらも走りに走った。だが、犬は一番大きいイノシシについているようで、止まっては下り、また止まったかと思うと下りで、またいつくどころか、なかなか姿も見えない。

とうとう小峰をいくつも横切り、朝見回った道に出てしまっ

た。そこで、咬み止めの奈智と千壽が置いていかれたらしく、私に近寄って来た。「行ってしまったか。この雪ではなあ。よしよし」と声をかけた。奈智は一二歳になる。ここまでで止めなければ仕方がない。もう一度「よしよし」。

時計は一時になっていた。イノシシの行く手は：と見ると、谷川を渡り、前の大山に登っていた。四大がついてはいるが、とても後を追える山ではない。ひとまず車に戻ることにしたが、途中、全く無線も入らない。

車に着くと、妻と孫が「獲れた？」と聞くので、「ダメだったよ。疲れたよ」と言うのと、「よく鳴いていたのね」と、残念そうに慰めてくれた。そして、二頭の犬を車に乗せてくれた。

● 激闘八時間 この獵犬達の執念に涙

しばらく、どうしたものかと思案していると、無線に止め鳴きの声が入ってきた。

とうとう止めたか。その声を頼りに車で探すことにし、道を行ったり来たりする。橋から曲がりくねった道を登り峠を越え、



右：1歳の千号，左：8時間も大猪を止めたクマ号

隣の集落までの三〇分ほどの間を探したが、土地を知らないことは恐ろしいことで、なかなか場所の特定ができない。峠で無線が一番強くなるのだから、この下のどれかの沢であることは間違いないのだが。

しかし、沢に行くと無線機は鳴らなくなり、奥に入っても駄目である。一沢ずつ攻めて、道を通っても音のしない最後の沢に、「ここもダメか…」と思いきや、

「ここもダメか…」と思いきや、声のすぐ下に立った。止めてい

ーがかすかに鳴り出した。さらに一〇分ほど進むと、急にシーバー音が強くなり、犬の鳴き声が聞こえるようになってきた。

この沢だったのか。だが、雪は膝まであり、喉もカラカラ。もう一步も動けない。ここから何とかしなければいけないのが単独猟である。犬の声に急ぎ立てられ、一步また一步と進む。もはや自分の足ではない。

フーツ。やつのことで鳴き

る場所は、切り立った五〇mほど上の小峰の大きな松の木の根元で、クマの尻尾だけが見える。クマが尻尾を盛んに振っているところを見ると、ガツチリ止めているようだ。

かなりの時間が経っているのに激しく攻撃しているようで、イノシシは「ギーギー」と鳴くが、だいぶ弱っているようだ。私としては、上から近寄りたいたのだが登れない。カラマツを背に、休みながら考えた。時計を見ると五時十五分で、すでに山に留まれる限界を大きく過ぎ、銃も撃てない時間になっていく。もうすぐ暗くなる。

それでも、何とかしなければ…と、這うように登ろうとしていると、竜とブルが私に気づいて下りて来た。見れば、両犬とも血だらけである。私を待ちきれなかったのか、「何で来ないんだ？」とでも言いたげに、足下に来たので「よしよし、よくやった」と抱き寄せると、安心したのか犬達は座り込んだ。そして疲れきった私は、当然へたり込んでいた。

イノシシに立ち向かっているクマとシロは、さらに元気づい



一頭でも止めるブル号。まだ喉に傷が残る。

たように相変わらずである。竜とブルは、私に「来い」というように、クマとシロの元へ戻ろうとする。もう駄目だ。体力も気力も、そして時間も。もう限界だった。

竜とブルに引き綱を付けると、大声で「クマ、シロ、帰るぞ！来い来い来い！」と呼んだ。だが、クマとシロは味方が来たとはばかり、益々強い鳴き声になっている。

わが愛犬達は私のことをどれほど待っていたことか。私は、



サム号(ブルーチェック)

二頭の名前を何度も何度も呼び続けながら、少しづつ遠ざかった。すっかり暗くなった山々に響き渡るクマとシロの鳴き声は、私の後を追うように激しく、そして悲しげな遠吠えとなつていつまでも続いていた。

後ろ髪を引かれる思いで、暗くなつた沢をぬかりながら転びながら、やつとのことで車の所にとどり着いた。無線の入る橋の所で少し待ってみたが、クマ

とシロは帰って来るどころか、益々激しく攻め続けているようで、鳴き声がガンガン無線に入ってくる。

クマとシロにしたなら、きっと私が来て撃ち獲ってくれると信じ、命懸けで止めていることだろう。そう思うと、鳴き声を聞くのが辛い。私達がいなくなると、二頭は戻らないだろうと思つたので、朝登つて来るときに見ておいた温泉に行つて、時間を置いてからまた来ようということになり、仕方なくその場を離れた。

しかし今日は、ビールを飲む気にもなれない。クマとシロを思うと、気が気ではない。それでもカラ元気を出し、孫と妻には「大丈夫だ、きっと元気で帰つて来るから」と、食事と入浴をさせた。私も温泉に浸かると、あれほど疲れていた体も足も、少し元気が出てきた。

八時頃、橋の所に行くのと、シロがポツンと座つて待っていた。可哀想になり、抱きしめて血だらけの体をタオルで拭いてやり、ケガの具合を調べたが、大きな傷はないようだ、それでもシロは、尻尾を振つて甘えている。

「ゴメンなシロ」と、何度も撫でてやる。

もう一方のクマは、まだ一頭で頑張っていた。結局クマが戻つて来たのは、九時頃であつた。尻尾を振つて、それでも思つたより元気であつた。クマは体が小さいので、抱き上げて思い切り撫でてやり、車に乗せた。

この日は、全犬血だらけだったので、大ケガを心配したが、幸いにもどの犬も大した傷ではなかつた。ただ、犬達の努力に報いてやれずにイノシシを撃ち獲ることができず、残念で残念でならず、そのことを犬達に心から詫びた。

かくして、わが愛犬は八時間



ダイ号(右, 2歳)と二代目アニー(8カ月)

にわたつてイノシシと闘い、止め続けたのである。そして私は、そのイノシシを撃ち獲つてやれなかつたのである。何とも恥ずかしく、お粗末な話である。

●素晴らしき獵友と獵場を得て

イノシシは獲れなかつたが、この日私は、後日に残る大きな宝を授かった。それは、前述の松土との出会いが、かけがえない獵友となり、この日失敗した山々は、後に喜びの獵場となつたことである。私にとってこのことは、何ものにも勝る喜びであり、末永く大切にしていきたいと思つている。(つづく)